

近代以降の隅田川右岸の中小河川における 橋詰広場の変遷分析

原田 真央¹・荻原 知子²・福井 恒明³

¹学生会員 法政大学大学院修士課程 デザイン工学研究科 都市環境デザイン工学専攻
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, E-mail:mao.harada.8n@stu.hosei.ac.jp)

²正会員 東京大学大学院 工学系研究科 社会基盤学専攻
(〒113-8160 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:ogiwara2022@g.ecc.u-tokyo.ac.jp)

³正会員 法政大学教授 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, E-mail:fukui@hosei.ac.jp)

都市空間を構成する公共的な場の一つに橋詰広場が存在する。江戸期の橋詰広場は、レジャーとしての見世ものや情報機能としての高札場、流通機能としての河岸など、街路と水辺を繋ぐ公共空間であった。近年の橋詰広場は、柵やフェンスで囲われていたり、植栽が生い茂っていたりなど、有効活用されているものが少ない。今後、都市の水辺復権に活かす知見を得るためには、街路と水辺を繋ぐ橋詰広場の歴史的な特性や社会的な位置づけを把握することが重要である。そこで本研究では、地図資料を用いて明治から現代にかけての橋詰広場の存在や設置施設の変遷過程を整理した。結果、東京市区改正や帝都復興事業、高度経済成長といった都市空間の改変と対応して、橋詰広場が変化する傾向にあることを明らかにした。

キーワード: 橋詰広場, 東京都心部, 都市河川, 地図資料, 変遷

1. 序論

(1) 研究背景

都市空間を構成する公共的な場の一つに、都市に住む人々を水辺に誘う空間としての橋詰広場がある。橋詰広場は、橋に取り付く道路の幅員よりも橋の幅員が狭かったために、必然的に橋詰に広場的な余地が生まれて¹⁾形成された。橋詰広場という用語は、明治維新前後に定着したものの、実体としては江戸時代初期には既に存在していたとされ、レジャーとしての見世ものや情報機能としての高札場、防災機能としての火の見櫓など、多様な都市機能が集積していた²⁾。また、江戸市街を流れる河川・堀割の橋梁のたもとには、船から人や物資を揚げ降ろす流通機能としての河岸が発達し³⁾、橋詰広場は街路と水辺を繋ぐ公共空間であった。関東大震災後の帝都復興事業では、橋詰広場の大きさや設置施設が初めて制度化され、材料置場や交番など様々な機能を持つ空間として注目されていた⁴⁾。しかし、1964(昭和39)年及び1966(昭和41)年の都市計画全面改訂に伴う街路計画の見直しにより、橋詰広場の新設がされなくなった⁵⁾。

近年の橋詰広場は、都市の人々が一息できる休憩場所や水辺に近づいてクルーズ体験ができる広場が一部存在するものの、柵やフェンスで囲われていたり、植栽が生

い茂っていたりなど、立ち入ることが困難なものが多い。また、高度経済成長期の急激な都市化による河川・堀割の埋め立てから、橋詰広場は従来の機能を失い、街路と水辺を繋ぐ公共空間として有効活用されなくなった。

本研究では、こうした存在意義が希薄化している橋詰広場を、人々の生活と水辺が乖離している現代都市の象徴の一つとして捉え、橋詰広場の変遷過程から歴史的な特性や社会的な位置づけを把握することで、今後の都市における水辺復権に活かすための知見を得ることを目指す。

(2) 既往研究, 目的と方法

a) 既往研究

橋詰広場を対象とした既往研究には、橋詰広場における設置施設の分布や変容に関する研究として、伊東⁶⁾の日本橋橋詰広場の変遷を明らかにした研究、高畑ら⁷⁾の下町3区(墨田・江東・中央)を対象に震災復興橋詰広場の施設分布を明らかにした研究、伊東ら⁸⁾の中央区を対象に戦災復興以降の橋詰広場の変容を明らかにした研究、伊東ら⁹⁾の帝都復興事業により設置された橋詰広場の現況を明らかにした研究がある。また、橋詰広場のデザインの特徴に着目した研究として、伊東ら¹⁰⁾の旧東京市内における震災復興橋梁のデザインの特徴を明らかにした研究、堀ら¹¹⁾の江戸時代後期における橋詰広場のデ

デザイン規範を明らかにした研究がある。この他に、橋詰広場の空間特性と利用特性に着目した研究として、伊東ら¹²⁾の旧東京市内に設置された橋詰広場の空間的特徴と周辺住民の利用状況を明らかにした研究がある。

これらの既往研究は、特定の橋梁や地域を対象にした研究や過去の1時点、もしくは過去と現在の2時点といった限定的な時期の研究が多い。橋詰広場が如何なる社会背景のもと変化してきたのかを明らかにするためには、長期的な変遷過程を確認することが必要である。本研究の先行研究である藤田ら¹³⁾の研究では、千代田区内に明治以降存在した84橋を対象に、1876（明治9）年から2020（令和2）年までの19時点の地図資料を用い、橋詰広場の設置施設や用途の変遷の傾向を明らかにした。本研究では、藤田ら¹³⁾の方法を踏襲し、対象橋梁を拡大することにより、東京都心部全体に関する分析を行う。

b) 目的と方法

本研究では、明治から現代にかけて東京都心部における橋梁を対象として、橋詰広場の存在や設置施設の変遷過程を把握し、各時代における橋詰広場の特徴や変化要因を明らかにすることを目的とする。

以上の目的を達成する方法として、地図資料を用いた明治から現代にかけての橋詰広場の存在や設置施設の変遷調査を実施する。

2. 研究対象

(1) 対象地

本研究の対象地は、隅田川右岸の中小河川が流れる千代田区・中央区内の地域とする（図-1）。

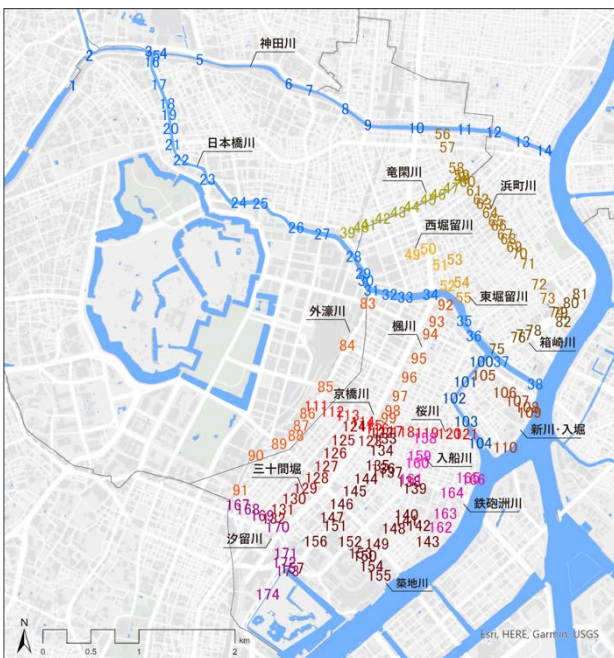


図-1 本研究の対象範囲

この地域は、江戸期から町人地として栄え、舟運に依存した生活を送っていたことから、数多くの橋梁が存在していた。また、1889（明治22）年からの東京市区改正による市街地の整備や、1923（大正12）年の関東大震災、及び1945（昭和20）年の東京大空襲による市街地の焼失、さらには、1960年代からの高度経済成長による急速な都市化など、多くの変革を経験してきた。

こうした明治から現代にかけて都市空間が大きく変貌してきた地域では、橋詰広場の変遷過程にも影響を与えていたと考える。

(2) 対象橋梁

『新編千代田区史¹⁴⁾』『千代田まち辞典¹⁵⁾』『中央区史¹⁶⁾』『中央区の橋・橋詰広場¹⁷⁾』『東京の橋100選+100¹⁸⁾』より、対象とする全174橋を抽出した（表-1）。

表-1 対象範囲の橋梁一覧

神田川に架かる橋梁 全14橋				
No	1	2	3	4
	牛込橋	飯田橋	小石川橋	
	後楽園橋	水道橋	御茶ノ水橋	
	聖橋	昌平橋	万世橋	
	10	11	12	
	和泉橋	美倉橋	左衛門橋	
	13	14		
	浅草橋	柳橋		
日本橋川に架かる橋梁 全24橋				
No	15	16	17	18
	三崎橋	新三崎橋	あいあい橋	
	18	19	20	
	新川橋	堀留橋	南堀留橋	
	21	22	23	
	俎橋	宝田橋	雉子橋	
	24	25	26	
	一ツ橋	錦橋	神田橋	
	27	28	29	
	鎌倉橋	新常盤橋	常磐橋	
	30	31	32	
	常盤橋	一石橋	西河岸橋	
	33	34	35	
	日本橋	江戸橋	鎧橋	
	36	37	38	
	茅場橋	湊橋	豊海橋	
竜閑川に架かる橋梁 全10橋				
No	39	40	41	42
	龍閑橋	白旗橋	西中之橋	
	42	43	44	
	今川橋	東中之橋	地藏橋	
	45	46	47	
	火除橋	九道橋	甚兵衛橋	
	48			
	玉出橋			
西堀留川に架かる橋梁 全4橋				
No	49	50	51	
	雲母橋	道浄橋	中之橋	
	52			
	荒布橋			
東堀留川に架かる橋梁 全3橋				
No	53	54	55	
	万橋	親父橋	思案橋	
浜町川に架かる橋梁 全19橋				
No	56	57	58	59
	柳原橋	大和橋	岩井橋	
	59	60	61	
	橋本橋	竹森橋	鞍掛橋	
	62	63	64	
	緑橋	汐見橋	千鳥橋	
	65	66	67	
	問屋橋	栄橋	高砂橋	
	68	69	70	
	元高砂橋	小川橋	久松橋	
	71	72	73	
	蠣兵衛橋	中之橋	浜洲橋	
	74			
	川口橋			
箱崎川に架かる橋梁 全8橋				
No	75	76	77	78
	箱崎橋	新永久橋	永久橋	
	78	79	80	
	土州橋	女橋	菖蒲橋	
	81	82		
	男橋	中洲橋		

No	外濠川に架かる橋梁 全9橋				
83	呉服橋	84	八重洲橋	85	鍛冶橋
86	有楽橋	87	新有楽橋	88	丸ノ内橋
89	数寄屋橋	90	山下橋	91	新幸橋
No	楓川に架かる橋梁 全8橋				
92	兜橋	93	海運橋	94	千代田橋
95	新場橋	96	久安橋	97	宝橋
98	松藩橋	99	弾正橋		
No	亀島川に架かる橋梁 全5橋				
100	霊岸橋	101	新亀島川	102	亀島川
103	高橋	104	南高橋		
No	新川・入堀に架かる橋梁 全6橋				
105	一之橋	106	新川橋	107	東新川橋
108	三之橋	109	廻漕橋	110	栄橋
No	京橋川に架かる橋梁 全6橋				
111	城辺橋	112	紺屋橋	113	京橋
114	炭谷橋	115	新京橋	116	白魚橋
No	桜川に架かる橋梁 全5橋				
117	新桜橋	118	桜橋	119	中之橋
120	八丁堀橋	121	稻荷橋		
No	三十間堀に架かる橋梁 全11橋				
122	新福寺橋	123	豊蔵橋	124	水谷橋
125	紀伊国橋	126	豊玉橋	127	朝日橋
128	三原橋	129	木挽橋	130	賑橋
131	出雲橋	132	八通八橋		
No	築地川に架かる橋梁 全25橋				
133	新金橋	134	新富橋	135	三吉橋
136	相引橋	137	築地橋	138	入船橋
139	軽子橋	140	暁橋	141	堺橋
142	南明橋	143	明石橋	144	亀井橋
145	祝橋	146	万年橋	147	采女橋
148	備前橋	149	門跡橋	150	小田原橋
151	北門橋	152	市場橋	153	起生橋
154	海幸橋	155	安芸橋	156	千代橋
157	尾張橋				
No	入船川に架かる橋梁 全4橋				
158	北船見橋	159	船見橋	160	新富橋
161	南新富橋				
No	鉄砲洲川に架かる橋梁 全5橋				
162	新湊橋	163	浦堀橋	164	見富橋
165	小橋	166	鉄砲洲橋		
No	汐留川に架かる橋梁 全8橋				
167	土橋	168	難波橋	169	新橋
170	蓬菜橋	171	汐留橋	172	汐先橋
173	南門橋	174	中の御門橋		

3. 橋詰広場の変遷調査

(1) 調査に用いる地図資料

橋詰広場が確認できる資料には、古地図、都市計画図、住宅地図等の地図資料と、古写真、図絵、空中写真がある。古写真や図絵では、橋詰広場の様子や空間的特徴が詳細に確認できるが、橋梁本体のみを描写したものが多く、橋詰広場の情報は少ない。また、空中写真では、橋

詰広場の存在は確認できるものの、植栽と建物以外の確認が困難である。

そのため、本研究では、対象橋梁の橋詰広場の様子を通時的に読み取ることができる地図資料を用い、明治期以降に発行された古地図・都市計画図・住宅地図より、1876年から2020年までの18時点とする（表-2）。

(2) 調査方法と読み取り内容

対象とする174橋に対し、右岸左岸、及び上流下流の4ヶ所の計694ヶ所の橋詰広場を確認する。橋詰広場の有無の判定方法は、藤田ら¹⁹⁾の先行研究を引き継ぎ、橋梁の幅員に対して空間の広がりを読み取れる場合は「有」、読み取れない場合は「存在しない」とした。設置施設が確認できない場合の「有」を「空地」とした（図-2）。

1876年から1951年までは、主に縮尺1/5000の古地図が存在し、警察署・派出所、公衆電話、見附が地図記号から読み取れる（図-3,4）。ただし、1932-36年の縮尺1/750の火災保険特殊地図は、詳細すぎるため公衆トイレやポスト、植栽といった前後の年代には見られない設置施設が記載されているほか、1947年の縮尺1/3000の帝都地形図も植栽の記載が詳しいという特徴がある。一方で、1963-65年の東京都都市計画図は用途地域の情報が主目的のため、細かい設置施設の記載がない。それ以外の1957-58年から2020年までの、住宅地図およびゼンリン住宅地図は、記載されている設置施設が公園・児童遊園、公衆トイレ、高速道路ランプ、地下鉄・改札出入口と多様で、読み取れる情報が安定している（図-5）。

表-2 使用する地図資料一覧

年代			地図資料名
1870年代	1876	明治9	明治東京全図 ¹⁹⁾
1880年代	1886-1888	明治19-21	東京実測全図 ²⁰⁾
1890年代	1895	明治28	東京実測全図 ²⁰⁾
1900年代	1907	明治40	東京十五区番地界入地図 ²¹⁾
1910年代	1911	明治44	番地界入東京全図 ²²⁾
1920年代	1919-1922	大正8-11	番地界入東京全図 ²³⁾
1930年代	1932-1936	昭和7-11	火災保険特殊地図 ²⁴⁾
1940年代	1947	昭和22	帝都地形図 ²⁵⁾
1950年代	1951	昭和26	東京五千分之一地形図 ²⁶⁾
	1957-1958	昭和32-33	全住宅案内図 ²⁷⁾
1960年代	1963-1965	昭和38-40	東京都都市計画図 ²⁸⁾
1970年代	1972	昭和49	全航空住宅地図 ²⁹⁾
	1978	昭和53	ゼンリン住宅地図 ³⁰⁾
1980年代	1986	昭和61	ゼンリン住宅地図 ³¹⁾
1990年代	1998	平成10	ゼンリン住宅地図 ³²⁾
2000年代	2004	平成16	ゼンリン住宅地図 ³³⁾
2010年代	2010	平成22	ゼンリン住宅地図 ³⁴⁾
2020年代	2020	令和2	ゼンリン住宅地図 ³⁵⁾

なお、橋梁が確認できない場合は「未架橋」と判別したが、河川埋め立て後も形状や設置施設から痕跡が確認できる橋梁は引き続き調査した。



図-2 地図資料の読み取り①



図-3 地図資料の読み取り②



図-4 地図資料の読み取り③



図-5 地図資料の読み取り④

(図-2, 3, 4, 5は藤田ら¹³⁾の図に筆者加筆)

(3) 調査結果

a) 河川・堀割ごとにみた架橋数の変遷

変遷調査により得られた各年代における架橋数の変遷を表-3に示す。ここでは、地図資料から確認できた橋梁を算出し、埋め立てられた河川・堀割は、該当する年代から黒の塗りつぶしで表現した。

b) 河川・堀割ごとにみた橋詰広場数の変遷

変遷調査により得られた各年代における橋詰広場数の変遷を表-4に示す。ここでは、空間の広がりが見られた「有」の橋詰広場を算出し、埋め立てられた河川・堀割は、該当する年代から黒の塗りつぶしで表現した。

c) 機能・役割ごとにみた設置施設数の変遷

変遷調査により得られた各年代における設置施設数の変遷を表-5に示す。変遷調査の結果、空地、警察署・派出所、見附、郵便局・ポスト、公衆電話、公衆トイレ、公園・児童遊園、植栽、消防署、資材置場・防災倉庫、地下鉄・改札出入口、高速道路ランプ、駐車場・駐輪場、神社、橋詰所の計15施設が確認できた。

表-3 河川・堀割ごとにみた架橋数の変遷

年代	河川・堀割																	架橋数		
	神田川	日本橋川	竜閑川	西堀留川	東堀留川	浜町川	箱崎川	外濠川	楓川	亀島川	新川・入堀	京橋川	桜川	三十間堀	築地川	入船川	鉄砲洲川		汐留川	
1870年代	1876	9	11	1	4	3	9	2	4	5	3	5	5	2	6	13	0	3	7	92
1880年代	1886-1888	11	11	10	4	3	16	2	5	5	4	5	5	3	8	15	4	3	7	121
1890年代	1895	12	12	10	2	3	16	4	5	6	4	5	5	3	8	15	4	4	7	125
1900年代	1907	12	17	10	2	3	16	5	5	6	4	5	5	3	7	15	4	5	7	131
1910年代	1911	12	17	10	2	3	16	5	4	7	4	5	5	3	7	16	4	5	8	133
1920年代	1919-1922	12	18	10	2	3	17	5	5	7	4	5	5	3	7	17	4	5	8	137
1930年代	1932-1936	14	24	10	0	3	19	8	9	8	5	5	6	5	9	24	0	0	8	157
1940年代	1947	14	24	10	0	3	19	8	9	8	5	5	6	5	9	22	0	0	7	154
1950年代	1951	14	24	10	0	3	18	7	9	8	5	5	6	5	9	21	0	0	7	151
	1957-1958	14	23	4	0	3	6	6	5	8	5	1	5	5	1	21	0	0	7	114
1960年代	1963-1965	14	23	4	0	3	6	6	2	8	5	1	5	5	1	21	0	0	7	111
1970年代	1972	14	23	4	0	3	6	6	2	6	5	0	3	5	1	21	0	0	5	104
	1978	14	23	3	0	3	4	3	2	6	5	0	3	4	1	19	0	0	4	94
1980年代	1986	14	23	3	0	3	4	2	2	6	5	0	3	2	1	17	0	0	4	89
1990年代	1998	14	23	3	0	3	3	2	2	6	5	0	3	2	1	15	0	0	4	86
2000年代	2004	14	24	3	0	2	3	2	2	6	5	0	3	2	1	15	0	0	4	86
2010年代	2010	14	24	3	0	2	3	2	2	6	5	0	3	2	1	15	0	0	5	87
2020年代	2020	14	24	3	0	2	3	2	2	6	5	0	3	2	1	15	0	0	5	87

表-4 河川・堀割ごとにみた橋詰広場数の変遷

年代	河川・堀割																	架橋数		
	神田川	日本橋川	竜閑川	西堀留川	東堀留川	浜町川	箱崎川	外濠川	楓川	亀島川	新川・入堀	京橋川	桜川	三十間堀	築地川	入船川	鉄砲洲川		汐留川	
1870年代	1876	32	43	0	16	10	27	5	16	20	10	6	16	7	20	48	0	10	22	92
1880年代	1886-1888	44	38	38	14	12	43	6	20	20	13	13	12	12	30	48	16	6	25	121
1890年代	1895	46	41	38	8	12	43	6	20	18	13	13	13	12	30	48	16	6	25	125
1900年代	1907	48	43	40	8	12	60	18	20	24	16	20	20	12	24	56	16	20	28	131
1910年代	1911	48	48	40	8	12	46	14	16	28	14	19	20	12	24	58	16	19	26	133
1920年代	1919-1922	48	55	40	8	12	49	16	18	28	14	20	20	12	24	62	16	20	26	137
1930年代	1932-1936	56	85	34	0	12	73	32	34	32	20	20	24	19	36	92	0	0	32	157
1940年代	1947	54	70	32	0	12	58	25	21	28	20	18	18	20	36	49	0	0	11	154
1950年代	1951	47	71	28	0	12	43	16	14	28	20	16	14	19	35	34	0	0	7	151
	1957-1958	49	64	11	0	5	7	18	4	28	20	4	12	16	4	32	0	0	7	114
1960年代	1963-1965	47	69	12	0	5	4	14	3	28	20	4	10	19	4	44	0	0	4	111
1970年代	1972	48	71	14	0	5	5	13	4	23	19	0	11	12	4	46	0	0	9	104
	1978	44	65	10	0	6	1	5	8	18	17	0	9	2	4	26	0	0	10	94
1980年代	1986	46	68	10	0	6	15	5	8	21	18	0	10	5	4	42	0	0	10	89
1990年代	1998	46	68	8	0	4	11	6	8	20	17	0	6	3	4	36	0	0	10	86
2000年代	2004	46	68	10	0	4	11	5	8	21	17	0	9	4	4	40	0	0	10	86
2010年代	2010	45	66	8	0	4	7	4	8	22	18	0	9	4	4	43	0	0	11	87
2020年代	2020	44	66	10	0	4	9	5	8	22	18	0	9	4	4	44	0	0	11	87

表-5より、空地、警察署・派出所は、1870年代から徐々に増加した後、大正期に最大の数となった後、徐々に減少しているが、現在でもその存在が確認できる。見附は、明治期には江戸期から残り続けていたものが確認できたが、大正期以降に消失しているため、その存在は確認できなくなった。一方で、公衆電話は、地図資料では1950年代以降に確認することができなくなったが、現在でもその存在が確認できるため、消失したのではなく地図資料に表現されなくなったと考えられる。また、公衆トイレ、公園・児童遊園、植栽、資材置場・防災倉庫は、1932（昭和7）年以降の住宅地図から、その存在が確認できるようになり、交通整理施設、橋詰所は、1950年代から確認できるようになった。郵便局・ポスト、消防署、神社は、明治から現代まで継続的に確認できた。

d) 橋詰広場の設置施設と河川・堀割の関係性

変遷調査より、明治から現代にかけての橋詰広場の設置施設と河川・堀割の関係性を表-6に示す。ここでは、①現存する河川・堀割、②埋め立て後も橋梁・橋詰広場の痕跡が確認できた河川・堀割、③埋め立て後に橋梁・橋詰広場の痕跡が確認できなくなった河川・堀割に分類し、分類ごとに数の多い設置施設を対応する色で塗りつぶした。

表-6より、①の河川・堀割には、多様な施設が設置されていることが分かる。特に、神田川、日本橋川には全ての機能・役割を有した施設が設置されている。②の河川・堀割には、主に空地、警察署・派出所、公衆トイレ、公園・児童遊園が設置されている。交通整理施設は、特定の河川・堀割に集中しており、特に築地川、汐留川

表-5 機能・役割ごとにみた設置施設数の変遷

機能・役割		空間確保	監視・治安		情報	公共施設		オープンスペース		防災		交通整理			その他		架橋数
年代	空地	警察署・派出所	見附	郵便局・ポスト	公衆電話	公衆トイレ	公園・児童遊園	植栽	消防署	資材置場・防災倉庫	地下鉄・改札出入口	高速道路ランプ	駐車場・駐輪場	神社	橋詰所		
1870年代	1876	290	0	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	92
1880年代	1886-1888	392	1	16	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	121
1890年代	1895	385	3	16	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	125
1900年代	1907	438	29	10	3	9	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	131
1910年代	1911	408	34	8	5	19	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	133
1920年代	1919-1922	421	40	2	5	23	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	137
1930年代	1932-1936	458	45	0	6	2	32	3	9	0	0	0	0	0	3	0	157
1940年代	1947	384	49	0	3	13	0	5	19	1	0	0	0	0	5	0	154
1950年代	1951	386	3	0	4	0	0	6	0	3	0	0	0	0	0	2	151
	1957-1958	185	15	0	3	0	8	35	2	2	8	2	0	0	4	2	114
1960年代	1963-1965	228	16	0	2	0	0	27	0	1	0	0	0	0	1	0	111
1970年代	1972	126	28	0	5	0	35	61	11	1	6	6	20	4	2	6	104
	1978	105	24	0	4	0	9	50	0	2	5	11	16	9	3	2	94
1980年代	1986	89	19	0	4	0	35	84	19	0	12	16	23	5	3	8	89
1990年代	1998	71	16	0	4	0	42	78	11	1	15	20	21	8	4	6	86
2000年代	2004	76	14	0	4	0	43	83	13	0	10	22	23	8	3	3	86
2010年代	2010	75	13	0	4	0	39	75	13	1	6	22	23	13	3	3	87
2020年代	2020	80	13	0	3	0	36	74	19	1	8	22	23	13	4	2	87

表-6 設置施設と河川・堀割の関係

機能・役割		空間確保	監視・治安		情報	公共施設		オープンスペース		防災		交通整理			その他		全架橋数
河川・堀割	空地	警察署・派出所	見附	郵便局・ポスト	公衆電話	公衆トイレ	公園・児童遊園	植栽	消防署	資材置場・防災倉庫	地下鉄・改札出入口	高速道路ランプ	駐車場・駐輪場	神社	橋詰所		
①	神田川															14	
	日本橋川															24	
	亀島川															5	
②	竜閑川															10	
	東堀留川															3	
	浜町川															19	
	箱崎川															8	
	外濠川															9	
	楓川															8	
	京橋川															6	
	桜川															5	
	三十間堀															11	
	築地川															25	
汐留川															8		
③	西堀留川															4	
	新川・入堀															6	
	入船川															4	
	鉄砲洲川															5	

には、高速道路ランプ、及び駐車場・駐輪場が設置されており、自動車交通に特化した利用形態にあると考えられる。③の河川・堀割は、埋め立て後に橋梁・橋詰広場の痕跡が確認できなくなったため、積極的な施設の設置はみられない。西堀留川のみ埋め立て以前は、警察署・派出所が設置されていた。

4. 橋詰広場の時代的特徴と変化要因

変遷調査結果より、文明開化期（1870年代から1910年代）、震災・戦災期（1920年代から1940年代）、高度経済成長期（1950年代から1970年代）、現代（1980年代から2020年代）の時代区分を設定し、各時代における橋詰広場の特徴と変化要因を考察する。

(1) 文明開化期（1870年代から1910年代）

表-3,4より、架橋数・橋詰広場数が増加していることが分かる。これは、竜閑川、浜町川、入船川の橋梁増加に伴い、橋詰広場も設置されたと考えられる。また、表-5より、警察署・派出所、公衆電話は、1900年代に入り急激に増加している一方で、見附は、1870年代から存在している。また、この時代の多くを空地が占めているが、その要因として、1873（明治6）年に明治政府が発行した「葭簀張床見世取り除ケノ布令³⁷⁾」により床見世の撤去・出店禁止となったため、橋詰広場が空地化し、商業機能が希薄化していったことが考えられる。

次に、文明開化期における特徴的な設置施設の分布を図-6に示す。警察署・派出所は、数多くの河川・堀割に分布していることが分かる。公衆電話は、1900（明治33）年に京橋のもとに初めて設置されて以降³⁸⁾、徐々に数を増やしていき、その設置場所は警察署・派出所付近に多い傾向がある。

このように、文明開化期における橋詰広場は、警察署・派出所、見附といった監視・治安機能を有した施設が多く、公衆電話が警察署・派出所と共に設置されやすい傾向にあったこと、また、1873（明治6）年に明治政府より発行された「葭簀張床見世取り除ケノ布令」の影響で、空地が多くを占めていたと考えられる。

(2) 震災・戦災期（1920年代から1940年代）

表-3,4より、架橋数・橋詰広場数が文明開化期よりも増加し、各時代の中で最も多い数値となっていることが分かる。また、表-5より、警察署・派出所、公衆電話、公衆トイレ、公園・児童遊園の増加といった設置施設の多様化が見られる。その要因として、1888（明治21）年以降の東京市区改正設計³⁹⁾による道路や鉄道、橋梁や防

火政策の整備のほか、1923（大正23）年に発生した関東大震災後から1932（昭和7）年まで実施された帝都復興事業により、橋詰広場の設置が初めて制度化され、それに伴い多様な施設が設置されたと考えられる。

次に、震災・戦災期における特徴的な設置施設の分布を図-7に示す。警察署・派出所は、文明開化期と同様に数多く分布し、それと共に公衆電話も設置されている。明治初期から設置され始めた公衆便所は、橋のたもとで用を足す人が多かったという理由から、その設置場所は「街頭便所構造改良法及び設置ヶ所等通達」により橋台や河岸地、堤防とされた⁴⁰⁾。また、その分布は、現在の神田、日本橋、銀座といった繁華街に多い傾向にある。

このように、震災・戦災期における橋詰広場は、東京市区改正、及び帝都復興事業により、橋詰広場の設置が促進され、それに伴い設置施設も多様化してきた発展期だと考えられる。

(3) 高度経済成長期（1950年代から1970年代）

表-3,4より、架橋数・橋詰広場数が大幅に減少していることが分かる。これは、戦後の瓦礫処理や高速道路建設による河川・堀割の埋め立てが要因だと考えられる。埋め立ての多くは、沿川住民からの強い要望によるもので、外濠が干潮の際は、外濠の水よりも便所から流出する糞尿の分量の方が多いとされるほど、当時の水質環境は悪化していた⁴¹⁾。また、表-5より、警察署・派出所は震災・戦災期と比較して減少しているが、公園・児童公園、資材置場・防災倉庫、交通整理施設は増加している。公園・児童遊園は、1922（大正11）年に御蔵前児童遊園が初めて設置され⁴²⁾、その後1947（昭和22）年の児童福祉法の制定⁴³⁾により、児童の遊び場を確保するために設置が促進したと考えられる。

次に、高度経済成長期における特徴的な設置施設の分布を図-8に示す。震災・戦災期からの大きな変化として、公園・児童遊園が増加しているが、その設置場所は、竜閑川、浜町川、楓川、桜川、築地川といった埋め立てられた河川・堀割に多く設置されやすい傾向にある。一方で、資材置場・防災倉庫の設置場所は神田川、日本橋川、亀島川といった現存する河川・堀割に多く分布しており、水辺で一時的に利用されやすい傾向にある。また、高速道路が架かる橋詰広場は、高速道路ランプに転用され、従来の橋詰広場の機能とは大きく異なっている。

このように、高度経済成長期の橋詰広場は、急激な都市化による河川・堀割の埋め立てやモータリゼーションの到来により、交通整理施設が増加し、従来の橋詰広場の機能が希薄化する一方、公園・児童遊園設置による児童の遊び場確保や、資材置場・防災倉庫設置による水辺の一時的な利用がされやすい傾向にあると考えられる。

(4)現代 (1980年代から2020年代)

表-3,4より、高度経済成長期と比較して架橋数・橋詰広場数は減少したものの、大きな変化は見られない。また、表-5より、警察署・派出所が減少している一方で、公園・児童遊園、及び交通施設全般が増加している。警察署・派出所の減少については、近年の治安情勢をもとに派出所の統廃合⁴⁹が推進されていることが要因だと考えられる。公園・児童遊園の増加は、1985(昭和60)年の第二次東京都長期計画において都市景観整備がうたわれ⁴⁵、その際に橋詰広場が適地に選ばれたと考えられる。また、交通整理施設の増加は、高度経済成長期から続く自動車交通の発展が影響していると考えられる。

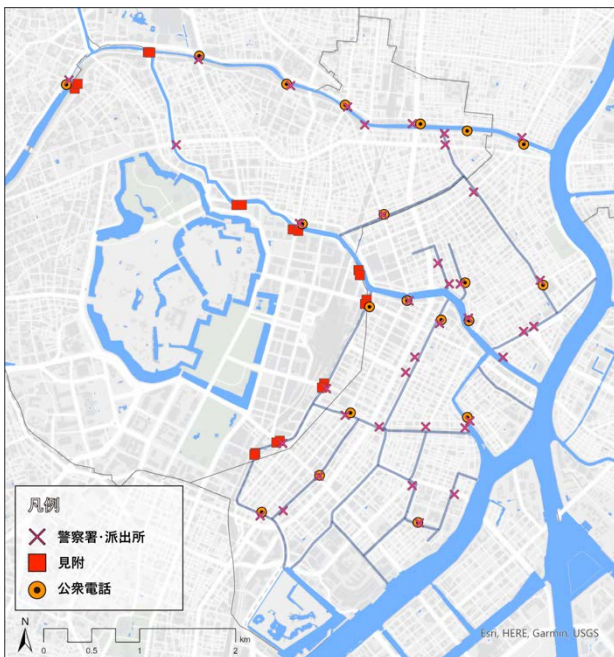


図-6 文明開化期における設置施設の分布

次に、現代における特徴的な設置施設の分布を図-9に示す。前述の通り、高度経済成長期からの大きな変化は見られないが、公園・児童遊園は埋め立てられた河川・堀割に増加しやすいという共通点が見られる。また、その分布は、一つの橋梁に対して、複数の橋詰広場を繋いで設置されるものが多く、都市の緑化やオープンスペースの確保に貢献していると考えられる。

このように、現代における橋詰広場は、警察署・派出所の統廃合や、高度経済成長期からの交通整理施設の増加が見られる一方で、複数の橋詰広場を繋いだ公園・児童遊園の設置により、多くの人が集える場として整備する動きが見られる。

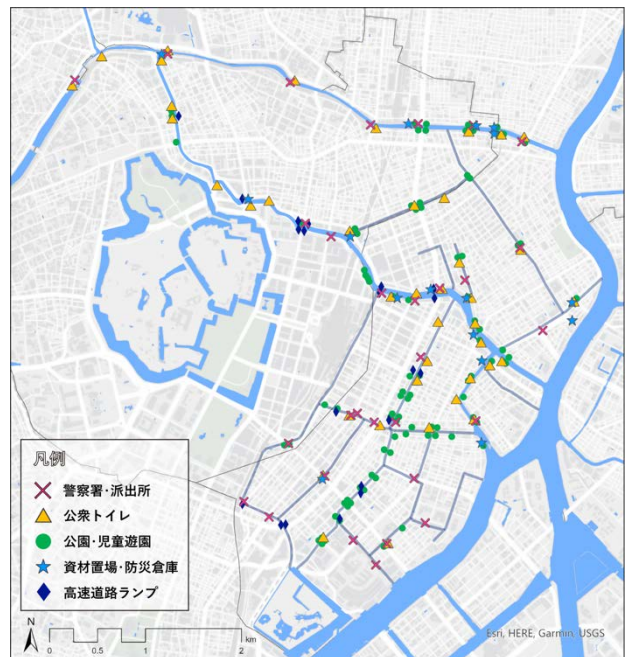


図-8 高度経済成長期における設置施設の分布

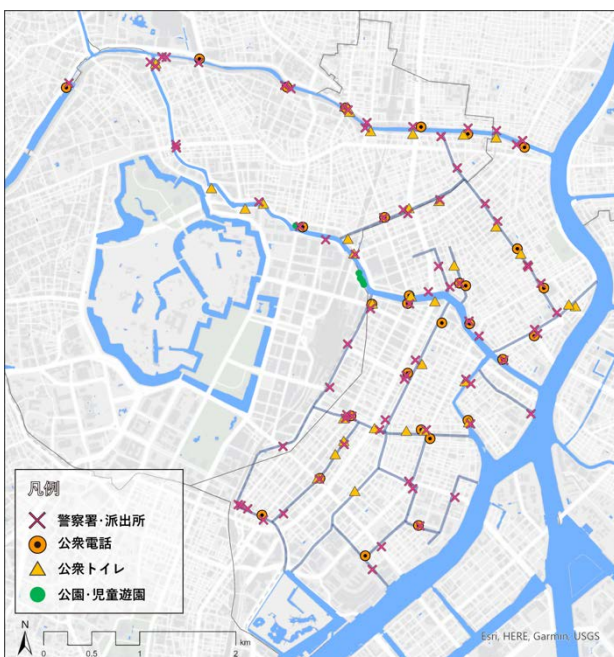


図-7 震災・戦災期における設置施設の分布

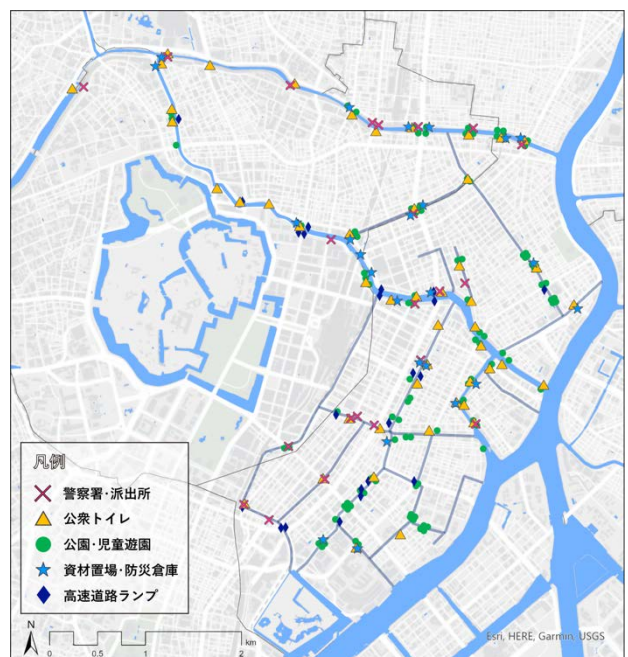


図-9 現代における設置施設の分布

5. 結論

(1) 成果

本研究では、地図資料を用いて、明治から現代にかけての東京都心部における橋詰広場の変遷過程を把握し、各時代の橋詰広場の特徴と変化要因を明らかにした。

文明開化期には、橋詰広場の多くを空地が占め、特定の設置施設に限定されていたものが、震災・戦災期には、東京市区改正や帝都復興事業により、橋詰広場の数が増加し、設置施設も多様化した。高度経済成長期からは、急激な都市化に伴い、河川・堀割が埋め立てられ水辺とは関係の薄い設置施設が増加したが、現代では公園・児童遊園の設置を促進することで、多くの人が集える場として橋詰広場を利用する傾向がある。

さらに、現存する河川・堀割には多様な施設が設置されやすく、埋め立て後も橋梁の痕跡が残る河川・堀割では公園・児童遊園の設置が促進され、痕跡が残らない河川・堀割では橋詰広場の利用がされない傾向にある。

(2) 今後の課題

橋詰広場における設置施設の変化要因について、区史や地域誌等の文献資料を用いて、社会背景と照らし合わせて詳細に考察する必要がある。また、河川・街路といった周辺環境との関係性についても考慮し、橋詰広場における地域ごとの特徴を考察する必要がある。

参考文献

- 1) 社団法人土木学会：美しい橋のデザインマニュアル，社団法人土木学会，pp.56-57，1982.
- 2) 伊東孝：東京の水 水辺の景観，鹿島出版会，pp.200-229，1986.
- 3) 鈴木理生：江戸の川 東京の川，井上書院，pp.125-155，1989.
- 4) 東京市：帝都復興区劃整理誌 第1編 帝都復興事業概観，東京市，pp.408-412，1932.
- 5) 東京都：東京の橋と景観，有限会社昌光印刷，p.68，1987.
- 6) 伊東孝：絵地図にみる橋詰広場施設と景観の移り変わり—江戸から今日まで—，日本土木史研究発表会論文集，6巻，pp.198-207，1986.
- 7) 高畑充宏，伊東孝，秋山哲男，伊東孝祐，溝口秀勝：震災復興橋詰広場にみる施設と分布—下町3区(墨田・江東・中央)を事例として—，総合都市研究，第65号，pp.95-106，1998.
- 8) 伊東孝祐，秋山哲男，伊東孝，溝口秀勝：戦災復興計画以降の震災復興橋詰広場の変容について—東京都中央区(旧日本橋区，旧京橋区)をケーススタディとして—，土木史研究，第19号，pp.31-39，1999.
- 9) 伊東孝祐，伊東孝，川西崇行：帝都復興事業により設置された橋詰広場の現況—東京を対象として—，土木史研究，30巻，pp.199-202，2010.
- 10) 伊東孝，岡田孝：震災復興橋梁の計画とデザインの特徴—旧東京市内における復興局架設橋梁を中心として—，日本土木史研究発表会論文集，4巻，pp.59-70，1984.

- 11) 堀繁，篠原修，溝口伸一：伝統的橋詰のデザイン規範—江戸後期の図会類を分析資料にして—，土木史研究，第10号，pp.93-102，1990.
- 12) 伊東孝祐，琴基正，山川仁，秋山哲男：橋詰広場の空間的扱いとその利用特性—旧東京市市街地地域を例として—，都市計画論文集，26巻，pp.43-48，1991.
- 13) 藤田景，高柳蓮，福井恒明：千代田区を対象とした橋詰空間の変遷，景観・デザイン研究講演集，No.17，pp.151-156，2021.
- 14) 東京都千代田区：新編千代田区史 区政史資料編，株式会社ぎょうせい，pp.379-380，1998.
- 15) 千代田区区民生活部：江戸・東京の歴史をたずねて 千代田まち辞典，図書印刷，pp.176-184，2005.
- 16) 東京都中央区：中央区史 下巻，大日本印刷，pp.379-400，1958.
- 17) 中央区教育委員会：中央区の橋・橋詰広場，廣濟堂印刷，pp.52-64，1998.
- 18) 紅林章央：東京の橋100選+100，都政新報社，2018.
- 19) 地図資料編纂会：5千分の1 江戸—東京市街地集成，明治東京全図明治9年，柏書房，1988.
- 20) 前掲19)，東京実測全図明治19-21年.
- 21) 前掲19)，東京実測全図明治28年.
- 22) 東京郵便局：東京市十五區番地界入地図 明治40年，人文社，1986.
- 23) 地図資料編纂会：5千分の1 江戸—東京市街地集成II，番地界入東京全図明治44年，柏書房，1990.
- 24) 前掲23)，番地界入東京全図大正8-11年.
- 25) 都市整図社：火災保険特殊地図，都市整図社，1932-1936.
- 26) 井口悦男：帝都地形図1922-47 第4集，之潮，2005.
- 27) 前掲23)，東京都五千分之一地形図昭和26年.
- 28) 住宅教会：東京都全住宅案内図帳 千代田区・中央区，人文社，1957-1958.
- 29) 東京都：東京都都市計画図，東京都千代田区・中央区所蔵，1963-1965.
- 30) 公共施設地区航空：航空住宅地図帳，同印刷部，1972.
- 31) 大迫正富：ゼンリンの住宅地図 東京都千代田区・中央区，日本住宅地図出版，1978.
- 32) ゼンリン：ゼンリン住宅地図 東京都千代田区・中央区，株式会社ゼンリン，1986.
- 33) ゼンリン：同上，1998.
- 34) ゼンリン：同上，2004.
- 35) ゼンリン：同上，2010.
- 36) ゼンリン：同上，2020.
- 37) 前掲2)，p.216.
- 38) NTT東日本：資料編 公衆電話機のうつりかわり https://www.ntt-east.co.jp/databook/pdf/2021_S3.pdf【最終閲覧日：2022.08.26】
- 39) 藤森照信：明治の東京計画，岩波書店，pp.97-99，2004.
- 40) 前掲16)，p.71.
- 41) 鈴木理生：江戸・東京の川と水辺の事典，柏書房，p.334，2003.
- 42) 東京都建設局：東京の公園110年，東京都情報連絡室，p.227，1985.
- 43) 前掲13)，p.215.
- 44) 島ノ江彩加，雨宮護，島田貴仁：交番・駐在所の廃止と地域住民の犯罪不安・被害リスク認知との関係，日本都市計画学会 都市計画論文集，No.20，pp.318-323，2021.
- 45) 前掲8)，p.37.